

はじめていくおつかい

－ 汎用性の高いツールを使用しての商品選択及び買い物の実践 －

山口県立宇部総合支援学校 教諭 北川 正史

キーワード：特別支援教育，生活単元学習，協働学習，iPad，電子黒板

1. はじめに

本時の対象生徒は、知的障害（聴覚、病弱等の重複障害児も含む）のある中学部1年生15名である。本時は、次時の学期末反省会で飲用する清涼飲料水を準備する目的で実施した。従来、清涼飲料水を飲用する活動がある授業では、あらかじめ3種類程度の飲料水を教員が準備し、その中からそれぞれの嗜好によって生徒が選択するという形式をとっていた。しかし、このような形式においては、嗜好に当てはまらなかったり、準備した物の個数の制限もあり、自身の嗜好に沿えない場合があったりし、選択することに楽しみ等を感じることができない生徒も見られていた。

これらを踏まえ、解決策として、「全員で買い物に行く」「準備された商品リストから選択する」等が考えられる。しかし、安全面や体調面のリスク、文字情報や印刷物では情報が十分でないこと等、主体的かつ有意義な商品選択をするには、様々な課題があるのが現状であった。このような現状の中、生活単元学習として、ただ単に商品を主体的に選択できるというだけでなく、領域・教科を合わせた指導として、生徒たちにそれらに沿った力を身に付けさせるため、ICTを活用した授業を実践した。

2. 学習課題の設定

本題材においては、『主体的な商品選択』『数学的活動』『協働学習』以上3点を意識して課題の設定を行った。

2.1 『主体的な商品選択』について

生徒たちは、保護者との買い物や学習の中での買い物等、ある程度の買い物経験はしている。しかし、日常的に買い物に出かけている生徒は少ない。さらに施設入所している生徒に至っては、買い物に出かける機会が少ないのが現状である。これらのことから生徒にとって、自分の欲しいものを主体的に選択できる機会が極めて少ないのではないかと推測される。

このような状況の中、制約はあるものの主体的に商品を選択できる機会を教育活動の中で設定することが、学習における達成感の獲得及び自立的な生活のため必要であると考えた。

2.2 『数学的活動』について

本時においては、値段の上限を120円と設定した。中学部1年では、小学校中学年程度の算数の問題に取り組んでいる生徒がいる一方、10までの数の概念が身につけていない生徒もいる。

このように実態は様々であるが、①数学科等で学んだ数量に対する理解を実践的・体験的な活動を通して深める。②金額の意味や計算の仕方がわからなくても、商品を選択するという体験を通して金銭に対する意識を高める。大きくこの二つの学びを期待することができると考え、120円以内の物を選択することを課題とした。

2.3 『協働学習』について

実際の活動に際しては、5名によるグループ活動とした。教員側からは、iPadの操作方法以外の支援は極力しないという約束のもと、「課題を解決するため協力しあうこと」「買い物に行く生徒（療育手帳Aの生徒が主体）にわかりやすいように配慮すること」を課題とした。

3. 実践内容

3.1 商品の選択へのICT活用について

(1) iPadの使用

商品選択の手段として、iPadを活用した。活用の際には、基本機能（カメラ、写真）と無料アプリ（MetaMoji Note Lite）を利用した。このアプリを利用し、デジタル（写真）の中にアナログ（手書き情報）を取り入れ、分かりやすくなる工夫をした他、容易に使用でき汎用性も高いという点も考慮した。これにより、実際の買い物の際は、画像を見ながら商品を選択することができ、容易に正確な購入をすることが期待できる。なお、グループでの活動に際しては「情報保障」の観点から、グループそれぞれに大型テレビを用意し、それにiPad画面を映すことで、全ての生徒が情報を共有できるようにして、アドバイス等しやすい環境にも配慮した。

iPadの使用に関しては、すでに使用経験がある生徒はいると思われるが、授業として使用することは本時が初めてである。実際の活動に際して、15分程度、拡大機能等の基本操作についての学習を行った。

(2) 生徒の活動～商品の選択～

商品の選択画面として、1つの商品棚すべてを写真に収めて使用した。高解像度で表示することで拡大機能により値段も鮮明に表示可能である。

実際の活動は次のような手順で行った。

- ①自分のページを確認（一人1ページ）
- ②商品を選択（〇等をつける）
- ③値段を記入（拡大して記入も可）
- ④値段のチェック（互いにチェック）



写真1 商品の選択画面1

3. 2 ICT活用のメリットについて

(1) 活用しない場合

- ・商品棚を撮影し印刷したものでは、情報（商品の内容、値段等）が不明瞭である。
- ・文字情報のみでは、生徒たちが主体となって、正確に買い物をするのが難しくなる。

(2) 活用した場合

- ・一つのツール（i P a d）で商品選択から買い物まで行うことができる。
- ・画像を活用でき、見やすく、わかりやすくなる他、それに文字情報を補完することができる。
- ・拡大縮小を容易に行うことができ、値段等も明瞭になる他、筆記に際しても、生徒の実態に応じて書きやすい大きさに調整することができる。

3. 3 電子黒板の活用について

(1) 電子マネーの使用

本時の買い物学習の支払いには電子マネーを使用した。今回、買い物に際しては、療育手帳Aの生徒が中心となって出かけた。全員学校生活においては、更衣や排泄等の支援を必要としないで基本的な生活習慣も身につけており、多くの場面で自立的な生活をしているが、金銭の管理や計算等については、実践の経験もほとんどなく、活動自体を苦手としている生徒がほとんどである。本時においての買い物の目標が、「正確に商品を買ってくること」であることから、電子マネーの使用が適切であると判断した。さらに、将来主体的に買い物をし、自立的な生活を送るためにも、有効なツールとしても考えられる。

(2) 電子黒板を用いた練習

本時に買い物に出かける生徒たちは、今回出かける店舗と同チェーンの店舗への買い物には全員行った経験はあるが、電子マネーの使用については初めてであった。そこで、赤外線型電子黒板を用いて事前の練習を行った。方法としては、プレゼンテーションソフトを用いて、同店舗のレジスターの画像を表示し、カードのセンサー部分にリンクを貼り、そこに物体が近づくと同店舗で使用されている音声と同じものが鳴るように設定した。これにより、実際の電子マネーカードを近づけることでリンクが作動し、模擬の支払い体験ができるようにした。この練習を、数回行った後実際の買い物に向かった。



写真2 電子マネーの使用練習

4. 成果

4. 1 『主体的な商品選択』について

結果として、生徒各々が主体的に商品を選択することができた。これらの活動の中で、二つ印象的な場面があった。一つ目は、商品を迷うことなく選択していたことである。これは、各々が素直に自身の嗜好に沿った選択ができていたからではないかと推測した。二つ目は、恥ずかしさ等から選択する様子を見られたくないと思った生徒が、i P a dの機動性を活かし、離れた場所で使用していたことである。機器の利便性を教員・生徒、双方が感じることができた場面である。

4. 2 『数学的活動』について

設定価格を超えた生徒に対して、他の生徒が価格内の類似した商品を勧め、適正な商品選択へと導いていく場面が見られた。その中で、数学的な活動の苦手な生徒に対しては、「二桁の数字を選べばいいよ」とアドバイスをしている様子や「2番目が0か1ならいいよ」と生徒各々の表現方法で伝えていた場面も見られ、実践的な体験や、体験を通して数量や金額への意識の芽生え等の成果があったと考えられる。

4. 3 『協働学習』について

i P a dの使用により、操作方法の支援のみで、生徒たちが主体となって買い物まで行うことができた。これは、ICTの活用があってこそであるが、協働なしには不可能であると言える。写真3のように、主体的に値段を画面上にわかりやすいように書き直し、書き写すことが得意な生徒の長所を活かそうとする様子は、正しく協働であると言える。このような結果からも、協働学習としての目的を達成できたと判断できる。



写真3 商品の選択画面2

5. 今後に向けて

本活動においては、授業における目的・目標を達成することの他、ICTが自立的な生活へと繋がる可能性を持ったツールのひとつであることを実感できるようにも配慮をした。現在、家庭と連携し本アプリを使用して、記憶に不安のある生徒の生活支援や、言葉による表現の苦手な生徒のコミュニケーションツールとしての活用等を進めている。また、これまで本校中部部では、電子マネーを活用した授業実践がなかったが、保護者から活用についての期待の声もあり、ICTとあわせて、その活用の仕方について、他の教員や保護者と連携しながら研究を進めていきたい。